

テーマ：景気動向指数（2017年9月）の予測

発表日：2017年10月31日（火）

～いざなぎ超えが実現。戦後第2位の長期回復に～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主席エコノミスト 新家 義貴
TEL:03-5221-4528

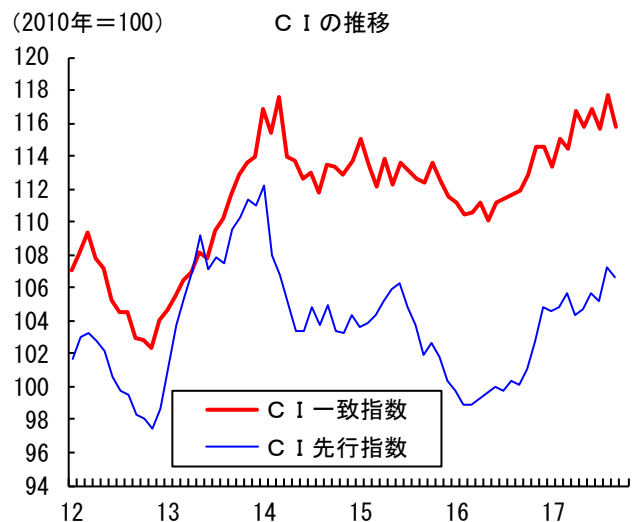
内閣府から11月8日に公表される2017年9月の景気動向指数では、C I一致指数を前月差▲1.8ポイントと予想する。内訳では、投資財出荷指数や生産財出荷指数、耐久消費財出荷指数、鉱工業生産指数などの生産・出荷関連系列が押し下げ要因になった見込みである。8月に前月差+2.0ポイントと上昇していた分のほとんどを吐き出す形になっており、やや弱めの結果である。3ヶ月移動平均前月差の値も▲0.3とマイナスに転じる見込みだ。ただ、C I一致指数と連動する傾向がある鉱工業指数の生産予測指数で10月に明確な上昇が見込まれていることから考えて、C I一致指数も10月分でははっきりした上昇に転じる可能性が高い。最終的には「均せば回復傾向持続」という数字になると思われる。弱気になる必要はないだろう。

また、9月のC I先行指数は前月差▲0.5ポイントと予想する。こちらは8月に高い伸び（前月差+2.0ポイント）となった後には悪くない数字であり、均してみれば緩やかな上昇傾向という判断でかまわない。内訳では、日経商品指数や東証株価指数でプラス寄与が見込まれる一方、中小企業売上げ見通しD Iや最終需要財在庫率指数の押し下げが大きくなる見込みである。

内閣府によるC I一致指数の基調判断は、12ヶ月連続で「改善」が予想され、景気が回復傾向を続けていることが示されるだろう。3ヶ月移動平均前月差はマイナスに転じることが予想されるが、基調判断下方修正の基準は満たさない。先行きについても、海外経済の回復を背景に輸出が増加する可能性が高いことや、企業収益の増加を受けて設備投資が回復することなどを背景に、景気は着実な回復傾向を続ける可能性が高い。C I一致指数の基調判断も「改善」が継続するだろう。

なお、足元の2017年9月までで景気拡張期間は58ヶ月に達したとみられ、これで1965年11月から1970年7月までの「いざなぎ景気」を抜いて戦後第2位になったとみられる。

また、これまでの戦後最長は2002年1月から2008年2月までの拡張局面の73ヶ月である。これを抜くには2019年1月まで拡張局面が続く必要があるが、海外景気の下振れや金融市場の大きな混乱といった外的ショックがなければ、戦後最長景気の実現は十分可能だろう。



(出所)内閣府「景気動向指数」

(注)直近の2017年9月は第一生命経済研究所による予測値